

はしがき

2010年に勤務校の出版助成を得て『談話と構文』を出版してから10年以上が過ぎた。この間、所属部局である北九州市立大学基盤教育センターの語学教育担当副センター長として、2度のカリキュラム改編と3度の中期計画・中期目標作成に取り組んだ。2019年には、本学で「英語語法文法学会第27回大会」を開催することができた。学部、大学院、研究会等でお世話になった先生方の多くが、大学を定年退職されたが、私も昨年還暦を迎え、定年まで数年を残すのみとなった。

本書は、2020年度学長選考型研究費B（出版助成）を受けて出版することとなった。

前著『談話と構文』では、分裂文といくつかの接続表現に関する論考をまとめたが、本書では、筆者がこれまでに大学紀要、雑誌、研究会誌等に発表した論文のうち、日英語対照研究に関する論考をまとめた。前著の「はしがき」を読み返すと「それまでバラバラであると考えていた研究と研究の間には実は繋がりがあることを発見し、そこからさらに新たな議論を展開することは非常に面白い営みである」などと尤もらしいことを書き連ねている。この10年余りを振り返ると、研究において自身が納得できるほど新たな議論を展開するまでには至っておらず、精進の足りなさを反省するばかりである。

本書を出版するにあたっては、株式会社大学教育出版の佐藤守氏と宮永将之氏には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

2021年1月

伊藤 晃

日英語対照研究と談話分析

目 次

はしがき	i
------------	---

第 1 章 日英語の分裂文の対照研究

—— 焦点化可能な要素に関する制約を中心に ——	1
--------------------------------	---

1. 日英語の分裂文の前提部分の構造について 1
 - (1) 日本語の分裂文 1
 - (2) 日英語の分裂文の対応関係 2
 - (3) 前提部分の構造 3
2. 日英語の分裂文の焦点化可能な要素について 4
 - (1) 日本語分裂文の焦点化可能な要素 5
 - (2) 名詞 + 格助詞 5
 - (3) 副詞節 6
 - (4) 日英語の分裂文の焦点化可能な要素 7
3. 1 章のまとめ 8

第 2 章 日英語の分裂文の対照研究

—— 前提部分が表す情報の違いについて ——	11
------------------------------	----

1. 英語の Cleft Sentences の談話における振る舞い 12
 - (1) 明示的な情報 13
 - (2) 非明示的な情報 13
 - (3) 対比 13
 - (4) 言外の先行詞 14
 - (5) 先行詞がテキストそのものの中ではなく、発話場面の規範 (Norm) の中に
あるもの 14
2. 日本語の分裂文 15
3. 2 章のまとめ 24

第3章 日英語の Open Proposition に関する一考察 27

1. 英語の Open Proposition について 28
2. 日本語の OP について 30
3. 3章のまとめ 37

第4章 日英語の頻度表現と主観性

——“often”と「しばしば」を中心に—— 39

1. 意志的な表現との共起関係 40
2. 感嘆文 42
3. “Enough”との共起関係 43
4. 分裂文における焦点化の可能性 44
5. 4章のまとめ 47

第5章 日英語の非限定的修飾節の構文における機能について

..... 49

1. 理由・根拠 51
2. コメントに対する重みづけ 52
3. 付帯状況 54
4. 対比 55
5. 等位接続 56
6. 5章のまとめ 59

第6章 日英語の非限定的修飾節の談話における機能について	61
1. 被修飾名詞の談話への新規導入の円滑化	62
2. 非談話主題化	68
3. 6章のまとめ	70
第7章 日英語の文主語の対照研究	71
1. Wh-Cleft と主題性	72
(1) 明示的な情報	72
(2) 非明示的な情報	73
(3) 対比的な情報	73
(4) 言外の先行詞	73
(5) 発話場面の規範	74
2. 日本語の分裂文と主題性	76
3. FPを含む構文と主題性	85
4. 7章のまとめ	87
第8章 日英語の埋め込み文をめぐって	89
1. 英語の間接疑問節	90
2. 日本語の間接疑問節	92
3. That節と「と」節	95
4. 8章のまとめ	101

第 9 章 日英語の結果構文に関する一考察	103
1. 2つのタイプの結果構文	105
(1) 語彙的結果構文	105
(2) 論理的結果構文	110
(3) 日本語には論理的結果構文が許されないか？	112
2. 直接的影響と結果述語の性格	115
3. 9章のまとめ	117
第 10 章 日英語の伝聞表現について	121
1. 感嘆表現との共起関係	122
2. 談話における機能	125
3. 10章のまとめ	134
引用・参考文献	135

■ 凡 例 ■

例文における各記号の意味は以下のとおり。

1. 「#」 : 談話の冒頭であることを示す
2. 「*」 : 非文であることを示す
3. 「?」 : 不自然な文であることを示す
4. 「??」:「?」よりも不自然さの度合いが高いことを示す
5. 「φ」 : 要素が存在しないことを示す

日英語対照研究と談話分析

第 1 章

日英語の分裂文の対照研究

—— 焦点化可能な要素に関する制約を中心に ——

英語には①のような文から派生された②③のような文が存在する。

- ① John bought a car.
- ② What John bought was a car.
- ③ It was a car that John bought.

③はCleft SentenceあるいはIt-Cleftと呼ばれ、②はPseudo-CleftあるいはWh-Cleftと呼ばれる。英語のCleftに相当する日本語の構文は④のような文から派生された⑤のような文である。

- ④ 太郎は車を買った。
- ⑤ 太郎が買ったのは車だ。

⑤のような文を分裂文あるいは便宜上「XのはYだ」構文と呼ぶこととする。本章の目標は、英語のCleftと日本語の分裂文を焦点化可能な要素に関する制約を中心に構文レベルで比較することである。

1. 日英語の分裂文の前提部分の構造について

(1) 日本語の分裂文

英語のcleftを構文レベルで分析したものとしては、1970年のAkmajianやHigginsの研究例が代表的であるが、日本語の分裂文を構文レベルで考察したものは少ないように思われる。本章で考察の対象とする日本語の分裂文とはどのような構文であるのかを明らかにしておきたい。日本語の分裂文、「XのはYだ」構文は前提部分つまり「X」の部分に変項の存在が想定され、この変項に値を与える要素が「Y」の位置に現れる形で成り立っている。先の⑤を例に

取って見てみると、「太郎がXを買った」という形で変項の存在が想定され、この変項に「車」が値を与えているのである。したがって、次の⑥のような文は分裂文とは区別される。

⑥ 太郎が車を買ったのは意外だった。

⑥は「XのはYだ」の形式を持っではいるが、⑤とは違って「X」の部分に変項の存在を想定することはできないからである。

(2) 日英語の分裂文の対応関係

英語には2つのタイプの分裂文、It-CleftとWh-Cleftが存在するが、日本語には「XのはYだ」構文しか存在しない。両言語の分裂文を比較する前に日本語の分裂文が英語のどちらのタイプの分裂文により良く対応するのかを確認しておこう。Inoue (1982) は、日英語の疑似分裂文（本章でいうところの「分裂文」、「XのはYだ」構文、英語のWh-Cleft）は同じ構造的、意味的な特徴を持つとしている。例えば次例のごとくである。

⑦ 学生たちが読みたがっていたのはこの談話分析の本でした。

前提

焦点

⑧ What the students wanted to read was this book on discourse analysis.

前提

焦点

より正確には⑦⑧の前提は⑨である。

⑨ The students wanted to read something.

したがって⑦⑧は同じ前提を持つ以下の疑問文に対する適切な答えとなる。

⑩ 学生たちは何を読みたがっていたのですか。

⑪ What did the students want to read?

以上のような事実から日本語の分裂文により良く対応するのはWh-Cleftであることが分かった。しかし、だからといって以下の議論においてIt-Cleftを考察の対象からはずしてしまうというわけではない。英語の2種類のCleftに対応する日本語の構文が1種類しかない以上、英語のIt-Cleft的な機能までもが日本語の分裂文によって果たされている可能性があるからである。

(3) 前提部分の構造

日英語の分裂文の対応関係が明らかになったところで、それぞれの構文の前提部分、つまり「XのはYだ」構文の「Xの」の部分と Wh-Cleft の wh 節の構造について考えてみよう。

まず Wh-Cleft について 1985 年の福地の研究では、what には疑問代名詞としての用法と関係代名詞としての用法があるが、Wh-Cleft の what は、どちらかという疑問詞の性格が濃く、同構文の主語は主要部を欠く関係節（全体として名詞句）ではなく、純粹に節と考えた方が良くとされており、そのように考える根拠として次の⑫⑬があげられている。

⑫ Was what John said immediately comprehensible to you?

⑬ * Was what John said that we should all go home?

つまり主語と動詞を入れ替えて疑問文にした場合、関係節を含む文⑫は可能であるが、Wh-Cleft⑬は不可能であるというのである。さらに、⑭に見られるように Wh-Cleft では前提部分と主文との間に時制の一致が要求される。

⑭ What John bought was a car. (* What John bought is a car.)

また Wh-Cleft の主文の動詞は原則として単数形である。

⑮ What John bought was a book. (* What John bought were books.)

このような事実も Wh-Cleft の前提部分の節としての性格を反映したものといえよう。

では次に日本語の分裂文の主語の部分について見ていこう。結論から先に述べると、日本語の分裂文、「XのはYだ」構文の名詞化接辞「の」は比較的高い名詞性を有しており、「Xの」の部分は名詞句を形成していると考えられる。

まず普通の体言相当語句の中または連体修飾句の中では主格の「が」と「の」を互いに変えることができる。「ガノ可変」といわれている現象である。分裂文においてはこのガノ可変が見られるだろうか。「のだ」文と比較しながら検討してみよう。

⑯ 昨日太郎が会ったのは花子だ。

⑰ 昨日太郎の会ったのは花子だ。

⑱ 雨が降っているのだ。

①⑨ *雨の降っているのだ.

「のだ」文の「の」は先行する一群の語句を体言的にまとめる力かなり弛緩してきているのに対して、分裂文の「の」は連体修飾語句を形成する力を持っているといえる。さらに霜崎（1983）によれば、②⑩に見られるように名詞化用法の「の」は母音がしばしば脱落して「ん」になる傾向が認められるのに対して、②⑪に見られるように代名用法の「の」（この場合「机」を指示する）にはそうした事実は認められないとしている。

②⑩ A：この机はどう見ても本職の作ったようには見えないね.

B：あたり前です。その机は僕が作ったのです。／その机は僕が作ったんです.

②⑪ A：どれがあなたの作った机なの？

B：その机が僕の作ったのです。／*その机が僕の作ったんです.

分裂文についてはどうであろうか.

②② *昨日太郎が会ったんは花子だ.

分裂文の「の」についても代名用法の「の」と同様の傾向が観察される.

以上の観察から明らかなように分裂文の「の」は比較的高い名詞性を有しており、「XのはYだ」の「Xの」の部分は、Wh-CleftのWh節とは異なり名詞句であると考えられる.

2. 日英語の分裂文の焦点化可能な要素について

英語の Cleft Sentence については、その焦点の位置にどのような要素が現れうるかに関しては、1970 年の Emonds, 1976 年の天野, 1985 年の Quirk *et al.* 等の研究があげられるが、日本語の分裂文に関してはこのような観点からの分析は見当たらない。そこで本節では、まず日本語の分裂文においてどのような要素が焦点化されうるかを見ていくことにする。そして、その後上述したような英語の分裂文に関する先行研究を参考にしながら比較検討を行う。

(1) 日本語分裂文の焦点化可能な要素

日本語の分裂文の実例を集めて観察してみると焦点に現れる要素に関して何らかの制約が存在しているように思われる。例えば②③の文から②④のような分裂文は作れても②⑤のような分裂文は作れない。

- ②③ 太郎は熱心に数学を勉強している。
- ②④ 太郎が熱心に勉強しているのは数学だ。
- ②⑤ *太郎が数学を勉強しているのは熱心にだ。

そこで「日本語の分裂文の焦点の位置に現れ得る要素は名詞相当語句である」という仮説を立てておき、以下でこの仮説の妥当性を検証する形で分析を進めていくことにする。

(2) 名詞＋格助詞

文②⑥から派生された②⑦②⑧の分裂文を見られたい。

- ②⑥ 会社はあの銀行から借金をしている。
- ②⑦ 会社が借金をしているのはあの銀行だ。
- ②⑧ 会社が借金をしているのはあの銀行からだ。

②⑧に見られるように日本語の分裂文の焦点の位置には「名詞＋格助詞」が現れることができる。これは先の仮説に対する反例となるだろうか。日本語では名詞に格助詞がついてもその名詞的性質が維持されやすい。その証拠を以下に2つ示す。まず第1に主題となれる要素は通常名詞であるが、格助詞を伴った名詞も主題化されうる。

- ②⑨ *美しいはひまわりだ。／*速くは太郎が走る。／*育つは太郎がすくすくとだ。
- ③⑩ 大阪は食べ物かうまい。

②⑨③⑩から明らかなように名詞は主題になれるが、形容詞、副詞、動詞等は主題化できない。「名詞＋格助詞」について見てみよう。

- ③⑪ 大阪では花博が開催されている。／大阪からは渋谷高校が出場した。
／大阪駅には障害者用のエレベーターがない。

③⑪より「名詞＋格助詞」は主題化が可能であり名詞性を持っているといえる。

次に、「AのB」という表現においては、A、Bには基本的には名詞が現れるが、「名詞＋格助詞」もこの枠組に収まる。

③② *美しいの極致／*速くの秘密／*育つの良さ

③③ 大阪の人口

③②③から名詞は「AのB」の枠組に収まるが、形容詞、副詞、動詞等はこの枠組に収まらないことが分かる。「名詞＋格助詞」について見てみよう。

③④ 花子からの電話／日光への修学旅行／花子との出会い

③④より「名詞＋格助詞」は「AのB」の枠組に収まり名詞性を持っているといえる。

以上の観察から明らかなように「名詞＋格助詞」には名詞性が認められ、したがって分裂文の焦点の位置に②⑧のように「名詞＋格助詞」が現れても先の仮説に対する反例にはならないといえる。

(3) 副詞節

本節では理由を表す副詞節の焦点化の可能性を検討する。次の③⑤～④③を見られたい。

③⑤ 花子が遅刻したから太郎は怒った。

③⑥ 風邪のウイルスに感染したので太郎は風邪をひいた。

③⑦ 勇気を身につけるために舞台に出る。

③⑧ 太郎が怒ったのは花子が遅刻したからだ。

③⑨ *太郎が風邪をひいたのは風邪のウイルスに感染したのでだ。

④① 舞台に出るのは勇気を身につけるためだ。

④② *花子が遅刻したからの太郎の憤慨。

④③ *ウイルスに感染したのでの太郎の風邪ひき

④④ 勇気を身につけるための舞台出演

④①～④④から明らかなように、「～から」「～ので」「～ため」のうち「AのB」のテストフレームに収まる、つまり名詞性を持つのは「～ため」だけである。したがって④①のような分裂文が成立しうるのは先の仮説の予想するところであるが、問題は③⑧に見られるように名詞性を持たないにもかかわらず「～か

ら」が分裂文の焦点の位置に現れるということである。この事実はどうのように説明すればよいだろうか。この問題は「から」と「ので」の機能の違いに注目することで解決されると思われる。永野（1951）、Nakada（1977）等によれば、「ので」が因果関係に立つ事柄を客観的に1つの事態として叙述するのに対して、「から」は理由や根拠を主観的に説明するものである。③⑧のような文は副詞節、「～から」が③⑨の「～ので」と違って話者の主観つまり新情報を与えているという点で分裂文の情報構造と共通している。このため分裂文の構造上の制約を override する形で名詞性を持たない「～から」が焦点の位置に現れるようになったと考えられる。

(4) 日英語の分裂文の焦点化可能な要素

(1) 項～(3) 項で日本語の分裂文の焦点の位置に現れうるのは基本的には名詞性を持つ要素であるということが明らかになった。ここでは先行研究を参考にしながら、英語の分裂文の焦点の位置に現れるのはどのような要素であるかを確認し、日本語の分裂文との対照分析を試みる。

Wh-Cleft, It-Cleftともに名詞句の焦点化が可能であることはいうまでもないが、『新英語学辞典』によれば、副詞類は、文副詞を除き、It-Cleftの焦点になれるが、Wh-Cleftの焦点にはなれない。

- ④④ * What John walked up to Mary was quietly.
- ④⑤ It was quietly that John walked up to Mary.
- ④⑥ * The one who Bill wants to share the room is with Albert.
- ④⑦ It is with Albert that Bill wants to share the room.
- ④⑧ It is because he is sick that John is not coming today.

That節、不定詞節、動詞句は、Wh-Cleftの焦点になれるが、It-Cleftの焦点にはなれない。

- ④⑨ What I was most afraid of was that he might be caught in the traffic jam.
- ⑤⑩ * It was that he might be caught in the traffic jam that I was most afraid of.

- ⑤① What my father wanted was for me to become a doctor.
 ⑤② * It was for me to become a doctor that my father wanted.
 ⑤③ What John did was write a letter to his father.
 ⑤④ * It was (to) write a letter to his father that John did.

(2) 項で見たように、英語の It-Cleft と Wh-Cleft のうち、日本語の分裂文により良く対応するのは Wh-Cleft である。

そこで日本語の分裂文と英語の Wh-Cleft について焦点化可能な要素の対応関係を見てみよう。まず④④に見られるように、Wh-Cleft では様態副詞の焦点化が不可能であるが、これは日本語の分裂文についても同様である。

- ⑤⑤ * 太郎が花子に近づいたのはゆっくりとだ。

次に Wh-Cleft では、that 節、不定詞節の焦点化が可能であるが、これらの要素にはいずれも名詞性が認められるので日本語の分裂文と共通している。また Wh-Cleft では動詞句の焦点化が可能であるが次例⑤⑥から明らかなように時制を伴うことはできない。

- ⑤⑥ * What John did was wrote a letter to his father.

したがって⑤③のような Wh-Cleft の焦点の位置に裸の動詞句が現れているような例も、④⑨⑤①と同様に名詞表現の周辺に位置づけることができる。次に比較の対象を It-Cleft にまで広げてみよう。

It-Cleft では④⑦④⑧のように Wh-Cleft では焦点化され得ない前置詞句、because 節の焦点化が可能であるのに対して、日本語の分裂文では (2) 項および (3) 項で見たように「名詞 + 格助詞」、理由を表す「～から」が焦点の位置に現れることが可能であり、この点では、日本語の分裂文に It-Cleft 的性格が見て取れる。

3. 1 章のまとめ

日本語の分裂文と英語の主に Wh-Cleft とを構文レベルで比較した結果、以下の諸点が明らかになった。

両構文の前提部分、つまり日本語の分裂文の「X の」の部分と Wh-Cleft の

wh節を比べて見ると、日本語の分裂文の前提部分は「の」の名詞性が比較的高く全体として名詞句を形成しているのに対して、Wh-Cleftの前提部分は主要部を欠く関係節、つまり全体として名詞句を形成しているのではなく純粋に節である。

次に両構文においてどのような要素が焦点化可能かを見てみると、日本語の分裂文では焦点の位置に現れることができる要素は名詞相当語句であり、英語のWh-Cleftについても概ねこの傾向があてはまる。また日本語の分裂文では、理由を表す副詞節「～から」が名詞性を持たないにもかかわらず焦点の位置に現れることができる。これは同要素が分裂文の「前提＋焦点」という情報構造になじみやすく同構文の統語的制約をoverrideしたものと考えられるが、英語のCleftにおいてはbecause節がWh-Cleftの焦点の位置には現れることができず、It-Cleftの焦点の位置に現れ得ることから、日本語の分裂文が焦点化可能な要素に関してIt-Cleft的なものまで引き受けているといえるかもしれない。

第2章

日英語の分裂文の対照研究

——前提部分が表す情報の違いについて——

本章で考察の対象とするのは、英語の Cleft Sentences とこれに対応する日本語の分裂文である。Cleft Sentences というのは、①のような文から派生される②および③のような文である。

- ① John ordered a coffee.
- ② What John ordered was a coffee.
- ③ It was a coffee that John ordered.

②は、Pseudo-CleftあるいはWh-Cleftと呼ばれ、③は、Cleft Sentence、あるいはIt-Cleftと呼ばれる。②あるいは③に対応する日本語の構文が④のような文から派生される分裂文⑤である。

- ④ 太郎はコーヒーを注文した。
- ⑤ 太郎が注文したのはコーヒーだ。

本章では、英語の Cleft Sentences と日本語の分裂文の談話における振る舞いを観察し、それぞれの構文の前提部分（Wh-Cleftのwh節、It-Cleftのthat節、日本語の分裂文の「～の」にあたる部分）が担う情報の性格の違いを明らかにする。次の第1節では、1978年のPrinceのCleft Sentencesについての分析を概観し、続く第2節で日本語の分裂文の談話における振る舞いを観察し、Cleft Sentences との対照分析を試みる。

1. 英語の Cleft Sentences の談話における振る舞い

日英語の分裂文の情報構造を見てみると、Wh-Cleftでは「前提＋焦点」It-Cleftでは「焦点＋前提」、そして日本語の分裂文では「前提＋焦点」となっており、英語の2種類の分裂文のうち日本語の分裂文により良く対応するのは、Wh-Cleftであることが分かる。そこでまず、Wh-Cleftの談話における振る舞いを観察する。ただし、以下の議論においてIt-Cleftを考察の対象からはずすわけではない。英語の2種類の構文に対応する日本語の構文が1種類しかない以上、日本語の分裂文が英語のWh-Cleft的な機能以外にIt-Cleft的なものまで引き受けている可能性があると考えられるからである。英語のCleft Sentencesを談話レベルで分析したものとしては1978年のPrince、1984年のDeclerck、1991年のCollins等の研究例があるが、ここでは、日英語の分裂文の前提部分が担う情報の性格の違いを検討するという本章の目標に最も良く適っていると思われる1978年のPrinceの研究を取り上げる。

まず1978年のPrinceの研究のうちWh-Cleftに関する部分を見ていこう。この研究によれば、「wh節の中身が発話を聞いた時に聞き手の意識の中に存在すると協調的な話者が想定しうるようなもの (Given Information) でなければ、Wh-Cleftは首尾一貫した形で談話の中に現れることはできない」ということである。同氏のあげている例を見てみよう（_iは同一指示であることを表す）。

- ⑥ There is no question what they_i are after. What the committee_i is after is somebody at the White House. They_i would like to get Haldeman or Colson, Ehrlichman.

本例では先行文脈に明示的に情報が与えられている。次例では先行文脈とのつながりを含意から知ることができる。

- ⑦ He is reported ... not to be as desperate today as he was yesterday but to still be on the brink, or at least shaky. What's made him shaky is that he's seen McCord bouncing out there and probably walking out scot free.

先行文脈から彼が“shaky”であることは分かっており、何かが彼をそういう状態にしたと推論することができる。Wh-Cleftの先行詞になりうる情報単位のタイプの主たるものとしてPrinceは以下のようなものをあげている。

(1) 明示的な情報

言語的あるいは非言語的文脈に明示的に与えられた情報。先の⑥および⑧がこれに当たる。

- ⑧ “You see, what I am doing, John, is putting you in the same situation as Pres. Eisenhower put me in with Adams”

(2) 非明示的な情報

⑥、⑧等に比べて解釈に際して聞き手に負担がかかる。

- ⑨ At first contact he developed a furious hatred for the party of the Social Democrats. “What most repelled me”, he says, “was its hostile attitude toward the struggle for...”

(3) 対比

先行する言語的な文脈との関係が対比的である。⑩では否定／肯定の対比が、⑪では原級／比較級の対比が見られる。

- ⑩ Precisely how pseudo - clefts are formed need not concern us... What is relevant is that in all the cases examined above - and in fact in most pseudo-clefts - the constituent following be is an NP.
- ⑪ The fact that... pre-eminence of some groups and regions over others shifted frequently is well known ... what is less known, or rather not admitted by some who prefer not to look at the staring presence of reality, is the other fact that...

(4) 言外の先行詞

Aが話しているなら、発話場面の参加者はAが何かを意味していると他の参加者が思っていると想定しうる。

- ⑫ Nixon: ...There is something to be said for not maybe this complete answer to this fellow, but maybe just a statement to me. My versions are these: bing, bing, bing. That is a possibility.

Dean: Uh huh.

Nixon: What I mean is we need something to answer somebody.

(5) 先行詞がテキストそのものののではなく、発話場面の規範 (Norm) の中にあるもの

- ⑬ Nixon: ...I knew there was something going on, but I didn't know it was a Hunt.

Dean: What really troubles me is: one, will this thing not break some day and the whole thing - domino situation -everything starts crumbling, fingers will be pointing...

このような例について Prince は、話者の関連する思考、観察、意見、反応等が聞き手の関心事と見なされ、聞き手の意識の中にあると想定されうるとしている。

- ⑭ Haldeman: He said, yes, he thinks John Dean did lie to the FBI when he said he wasn't sure whether Howard Hunt had an office in the White House.

Dean: I said I had to check it out. What happened is that the agent asked if he could see the office...

さらに、⑭のような例については、出来事は起こり続ける、そしてこうした出来事は我々に固有で不変の関心事であるという語用論的な原則があるようであるとしている。以上、1978年のPrinceの研究のWh-Cleftに関する部分を概観し、同構文の前提部分、すなわちwh節が聞き手の意識の中に存在すると話者が協調的に想定しうる情報 (Given Information) を表すことを確認した。

2. 日本語の分裂文

本節では、日本語の分裂文が談話においてどのような振る舞いを見せるかを観察し、その前提部分が先に見た英語の Wh-Cleft の前提部分とは異なって聞き手の意識の中に存在すると話者が想定しうのような情報を表してはいないことを主張する。まず次例を見られたい。

- ⑮ タイから国境を越え、UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）の大型トラックがカンボジアの首都・プノンペンを目指してばく進している。（中略）タイ国境に延びる国道5号。土煙の中から、突然、トラックが現れて我々の行く手をさえぎった。給水車がある。住宅用のプレハブを積んだトラックも、全部で203台。運転するのは、タイ、インドネシアなどPKO（国連平和維持活動）に参加している軍人だ。（毎日新聞 1992年4月3日）

(Large-sized trucks of UNTAC rushed to Phnom-Penh, the capital of Cambodia, crossing the border from Thailand. (omitted). The national road No.5 leading to the border of Thailand. From a cloud of dust, suddenly the trucks appeared and barred our way. There were trucks for water supply and trucks loaded with prefabricated houses and so on. They amounted to 203. The people who drove these trucks were soldiers participating in PKO from Thailand, Indonesia etc.)

本例を見る限りは、日本語の分裂文の前提部分も先に見た英語の Wh-Cleft のそれと同様に Given Information を表していると考えることができそうである。先行文脈に基づいて聞き手が「誰かが運転する」と考えているといった想定を話者が行いうると考えるのは妥当であると思われるからである。さらに、本例の英語訳においては、Wh-Cleft が自然な形で談話の中に現れている。次例についてはどうだろう。

- ⑯ そこへまたアルバム「旅ひととせ」の復刻盤が出た。昭和61年、ひばりの芸能生活40年を記念して、小椋佳が全12曲を作詞作曲。女

性と別れた男が、1年がかりで全国を旅し、また元へ戻るストーリーの組曲で、1曲ずつがご当地ソングの仕立て。シングルになったのはそのうちの3曲だけで「函館山から」のほかはカラオケにもめったにない。(毎日新聞 1992年3月23日)

(In addition to that, the album “Tabi hitotose” was revived. In the 61st year of Showa, Kei Ogura composed and versified all of the 12 songs in commemoration of Hibari’s 40 years of life in show business. The 12 songs make a suite telling a story in which a man who parted from a woman travels all over Japan for one year and comes back. What became a single was only three of those songs. These three songs are rarely included in karaoke except “Hakodateyama kara”)

本例では、言語的な文脈に基づいてというよりも、「アルバムが出れば、そのうちの何曲かがシングルカットされるものである」といった言語外の知識に基づいて「何曲かがシングルになった」と聞き手が考えていると話者は想定しうると考えることができるかもしれない。英語訳における Wh-Cleft の自然さにも問題はない。これまでに観察した例では、日本語の分裂文の前提部分も英語の Wh-Cleft のそれと同様に Given Information を表すと考えることが可能であると思われるが、以下の例ではそのように考えることは不可能である。

- ⑰ 中村監督は「宙返りが得意な、運動神経抜群の選手だった。事故後見舞いに行き、『医者には、死にたくても、死ねない体になったんだと言われました』と、本人から聞かされた時は涙が止まらなかった」と話す。1年10ヵ月の病院生活中、リハビリに励んだ。力になってくれた家族や友人への恩返しをしたかったが、収入もない。執筆のきっかけだった。文章を書くようになって、思い出したのは、中村監督の長女で、時々野球部寮に遊びに来た聡子ちゃん（当時7歳、現在PL学園高校1年）のこと。(毎日新聞 1992年4月3日)

(Mr. Nakamura says, “He was a player with superb motor nerves who was good at the somersault. After the accident, I went to see him at the hospital. I couldn’t stop crying when I heard from him that he had been

told by the doctor that his body was damaged so badly that he could not kill himself.” During the one year and ten month long life in the hospital, he devoted himself to rehabilitation. He wanted to repay the kindness of his family members and friends who supported him but he did not have any income. This made him begin to write. ? The person who he remembered after he started writing was Satoko (seven years old then, a freshmen at PL Gakuen High School now), Mr. Nakamura’s daughter, who sometimes visited the dormitory for the baseball club. / After he started writing, he remembered Satoko (seven years old then, a freshmen at PL Gakuen High School now), Mr. Nakamura’s daughter, who sometimes visited the dormitory for the baseball club.)

本例においては、言語的な文脈に基づく形でも、あるいは言語外の知識に基づく形でも、聞き手が「文章を書くようになって、何かを思い出した」と考えているといった想定を話者が行いうるとは考えられない。英語訳を見てみると、適当な文脈情報が与えられないために、Wh-Cleftの使用が不自然なものになっているのが分かる。次の⑬についても同様である。

- ⑬ しかし、私たち 50 代の年齢層は、かつてテレビのなかった少年時代には、講談本や大衆小説を読んだでしょう。映画も一生懸命見に行きました。それに、漫画界も今みたいに硬派の劇画からナンセンス漫画にいたるような幅広い広がりを持っていなかった。だから、必然的に活字を追いかけたのです。「オレたちは夏目漱石やトルストイを読みあさったもんだ」という熟年にもよく出会いますが、今の漫画はそういう文学作品に近いレベルまで芸術性を高めてきているのですよ。現に、亡くなった手塚治虫さんはツルゲーネフの『罪と罰』やゲーテの『ファウスト』を芸術のレベルで漫画化されていました。よく有害なセックス描写として批判されるのは「青年コミック」「レディース・コミック」と呼ばれる漫画です。(毎日新聞 1992 年 3 月 29 日)

(However, we in our 50s read story books and popular novels in our childhood, when there were no television sets. Also, we flocked

to see the movies. In addition to that, the world of comics was not so diversified as that of today, which covers hardboiled comics to nonsense comics. Naturally, we longed for the written medium. I often meet middle-aged men who say “We used to read Soseki Natsume or Tolstoi a lot” but the comics of today have improved their artistic value close to the level of such literary works. Actually, Mr. Osamu Tezuka cartooned Turegenef’s “Crimes and Punishment” and Goethe’s “Faust” at the level of art. * What is often criticized as noxious description of sex is the comics called “comics for youth” and “ladies’ comics” / The comics called “comics for youth” and “ladies’ comics” are often criticized as noxious description of sex.)

本例においても、話者が聞き手の知識の状態について何らかの想定を行っているとは考えられない。つまり、言語的、非言語的文脈に基づいて聞き手が「よく有害なセックス描写として何かが批判される」と考えていると話者が想定しうるとは考えられない。先の⑬と同様に、英語訳における Wh-Cleft の使用は不自然なものとなっている。日本語の分裂文は、先の⑮、⑯に見られるように結果として先行文脈を受けることはあっても、英語の Wh-Cleft のように先行文脈に依存する形でしか、あるいは先行文脈に基づいて前提部分が聞き手の意識の中に存在すると話者が想定しうるような情報 (Given Information) になっていなければ、談話の中に自然な形で現れることができないといった構文ではないのである。先行部分とのつながりに注意しながら、さらに次の⑰を見てみよう。

- ⑰ 「兄のいる湾岸は海水の表面はきれいなのに、下は原油がコールトールのじゅうたんのようにになっているそうです。それを掘り起こし、ひしゃくですくって捨てる。マングローブは根も幹も原油で真っ黒になっているといいます」コンプレッサーでマングローブに緑岩の粉を吹きつけ、油を除去する。8 人がかりでしているが、大変な労働だ。海底の貝類はすべて死に絶え、環形動物のゴカイが不気味に動き回っている。目を楽しませてくれるのは沖の島にいる 2 羽のシラサギだ

け。(毎日新聞 1992 年 3 月 19 日)

“I hear that at the gulf where my brother is staying, the sea water is clear at the surface but under the surface crude oil lies like a carpet of coal tar. He digs up the crude oil, ladles it and throws it away. The Mangroves’ roots and trunks have gone black with crude oil.” He gets rid of the oil from the mangroves by spraying ryokugan powder using a compressor. He works with seven people but still it is hard work. Shellfishes in the seabed are all dead. Gokais are moving around eerily.

* What pleases him is just two birds at an island in the offing. / Just two birds at an island in the offing please him.)

言語的な文脈を考えても、非言語的な文脈を考えても、分裂文と先行部分との間につながりを見いだすことはできず、聞き手が「何かが目を楽しませてくれる」と考えているといった想定を話者が行いうるとは考えられない。英語訳から明らかなように、このような状況での Wh-Cleft の使用は、やはり不自然なものとなっている。次例では、分裂文が談話の冒頭に現れている。(＃は談話の冒頭であることを示す)

②⑩ ＃ 井下田憲さんが異常に気付いたのは 4 年前の 10 月 10 日だった。
朝、目を覚まして布団から起きようとしたが、転がるばかりで起き上がることができない。寝ぼけているのかなと思った。53 歳の井下田さんは救急車で病院に運ばれた。脳卒中で左半身がまひしていた。
(毎日新聞 1991 年 7 月 18 日)

(＃ * The day when Mr. Ken Igeta became aware of the disorder was October 10th four years ago. / Mr. Ken Igeta became aware of the disorder October 10th four years ago. That morning, he woke up and tried to get up from his futon, but he could not get up and kept falling down.)

このような分裂文の存在は、同構文において話者は聞き手の知識の状態について何らかの想定を行っているのではないという小論の主張をさらに支持するものである。先行文脈が存在しないし、前提部分の内容から考えて非言語的な

文脈とのつながりを認めることもできない。同様の状況における Wh-Cleft の使用が不自然であるのは、言うまでもない。次の②①②②についても同様である。

- ②① # ガリレオが望遠鏡をつくったとき、踊り上がって喜んだのは軍部だった。「皆さまお気付きの通り、この機械を用いれば、われわれは敵の艦隊を敵より 2 時間早く知ることができるのであります」プレヒトは『ガリレイの生涯』の中でベネチア造兵廠幹部にこういわせている。科学的発明の軍事利用。(毎日新聞 1991 年 11 月 2 日)

(# * The one who was so delighted that they danced when Galileo made a telescope was the military authorities. / When Galileo made a telescope, the military authorities were so delighted that they danced. “As you can see, we can find the enemies’ fleets two hours earlier than the enemies by using this instrument.” This is what Bulehito had the executive of the arms factory in Venice say in “Life of Galilei.”)

- ②② # 私が日本女子大に入学したのは 1946 年、敗戦の翌年である。住む家がない、食物がない、学費もなくて進学できない…。そんな生活苦の中で、学生であることが「負い目」に感じられるような時代であった。(毎日新聞 1990 年 4 月 5 日)

(# ? The time when I entered Nihon Women’s University was 1946, one year after the end of World War II. / I entered Nihon Wonen’s University in 1946, one year after the end of World War II. There was nowhere to live, no food, and no money for tuition so a lot of people gave up going to tertiary institutions.)

本例の分裂文の前提部分で表されているのは、話者自身の経験であり、このような状況において聞き手の意識の中に存在すると話者が想定しうるような情報ではない。

次に第 1 節で見た 1978 年の Prince の研究で Wh-Cleft の先行詞になりうる情報単位のタイプとしてあげられている「言外の先行詞」、「発話場面の規範」との関連で日本語の分裂文を考えてみたい。「言外の先行詞」と「発話場面の規範」は他のタイプの情報単位と異なり、対話という状況においてのみ有効である。